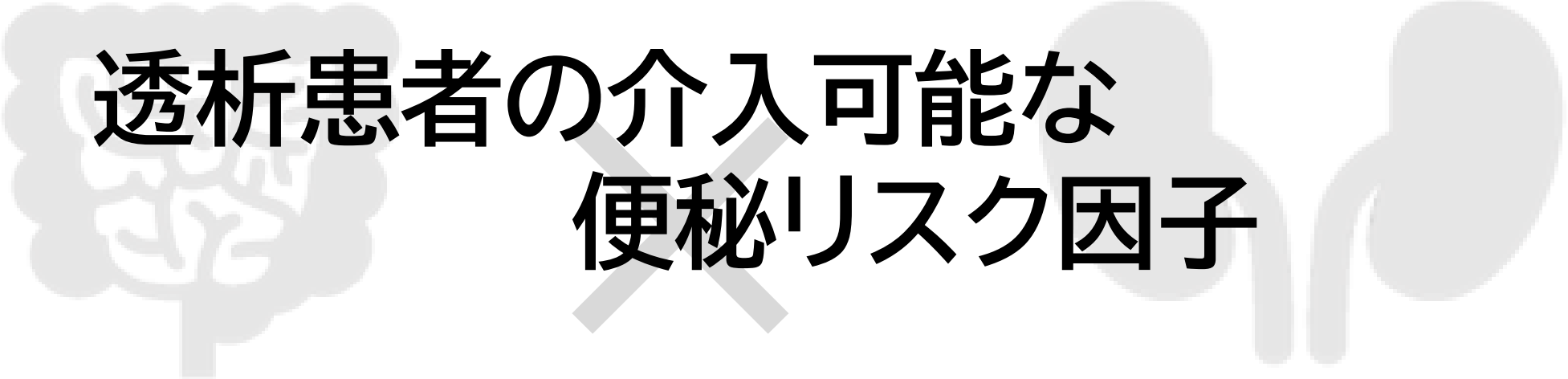


透析患者の介入可能な 便秘リスク因子



医療法人いつき会 守山いつき病院

COI開示

発表者名: ○○○○○

演題発表内容に関連し、発表者が開示すべき
COI関係にある企業はありません。

目 的

便秘のリスク因子を横断研究により詳細に明らかにし、この研究を通じて透析患者の便秘に関する新たな洞察を得ることである。

特に、リン吸着薬の選択に焦点を当て、治療戦略においてどのように最適な選択を行うかについて着目した。

対象・方法

対象:3法人6施設の慢性維持血液透析患者

方法:①便秘の定義(ROMEIV基準による機能性便秘の定義より)

「排便が週3回未満もしくは便秘治療薬内服中・自己対処中の状態」

②調査項目 年齢・性別・介助必要度・排便間隔
下剤処方の有無・下剤の種類
サプリメントや漢方などの自己購入品の有無
リン吸着薬の種類・透析前血清リン濃度

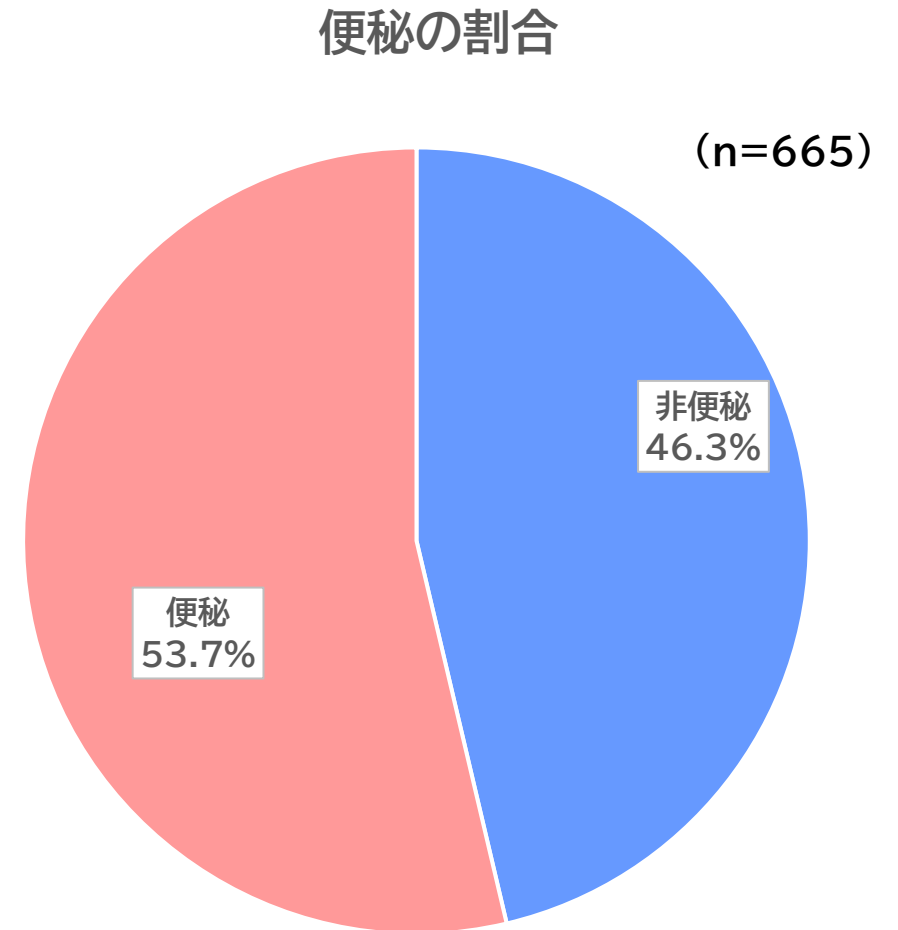
③便秘の有無を従属変数とする年齢と性で補正した
多変量ロジスティック回帰でリスク因子を探索

「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針ガイドンス^(文部科学省・厚生労働省・経済産業省)」を基に、匿名化データを 使用し、倫理指針を遵守の上、学術目的に限り活用します。

結 果

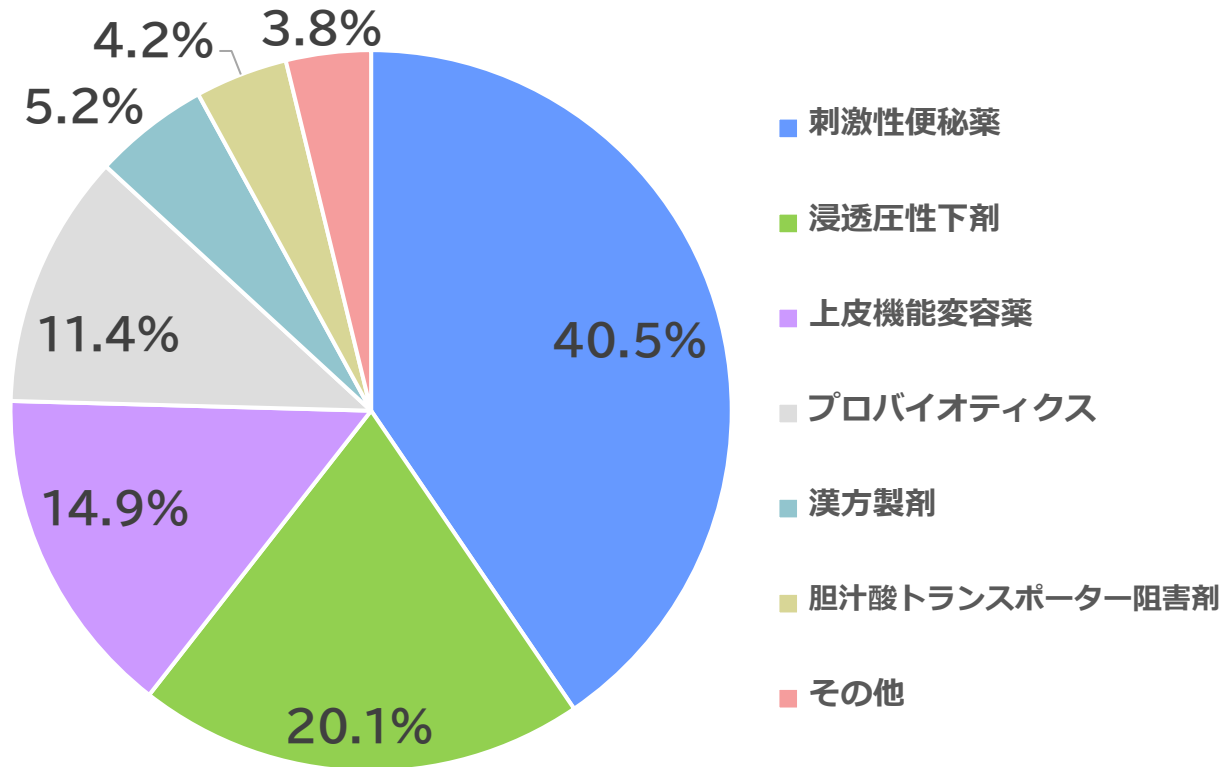
施設名	患者数(名)	平均年齢(歳)
Aクリニック	106	68.2±12.9
Bクリニックー	140	67.8±13.4
C病院	152	75.1±11.7
Dクリニック	82	72.0±12.1
C病院	99	70.4±12.6
Dクリニック	86	68.6±14.1
合計	665	70.5±13.1

	患者数(名)	平均年齢(歳)
男性	428	69.4±13.3
女性	237	72.5±12.3

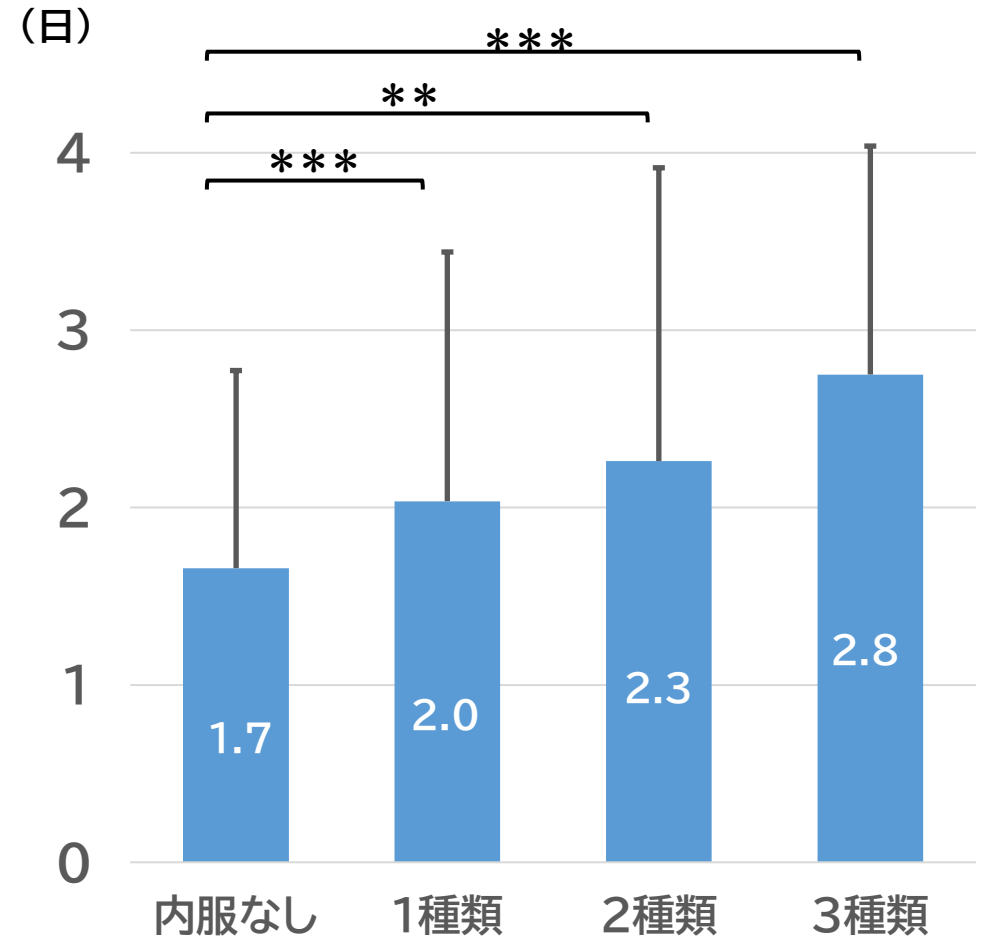


結 果

便秘薬の種類



便秘薬数と排便間隔

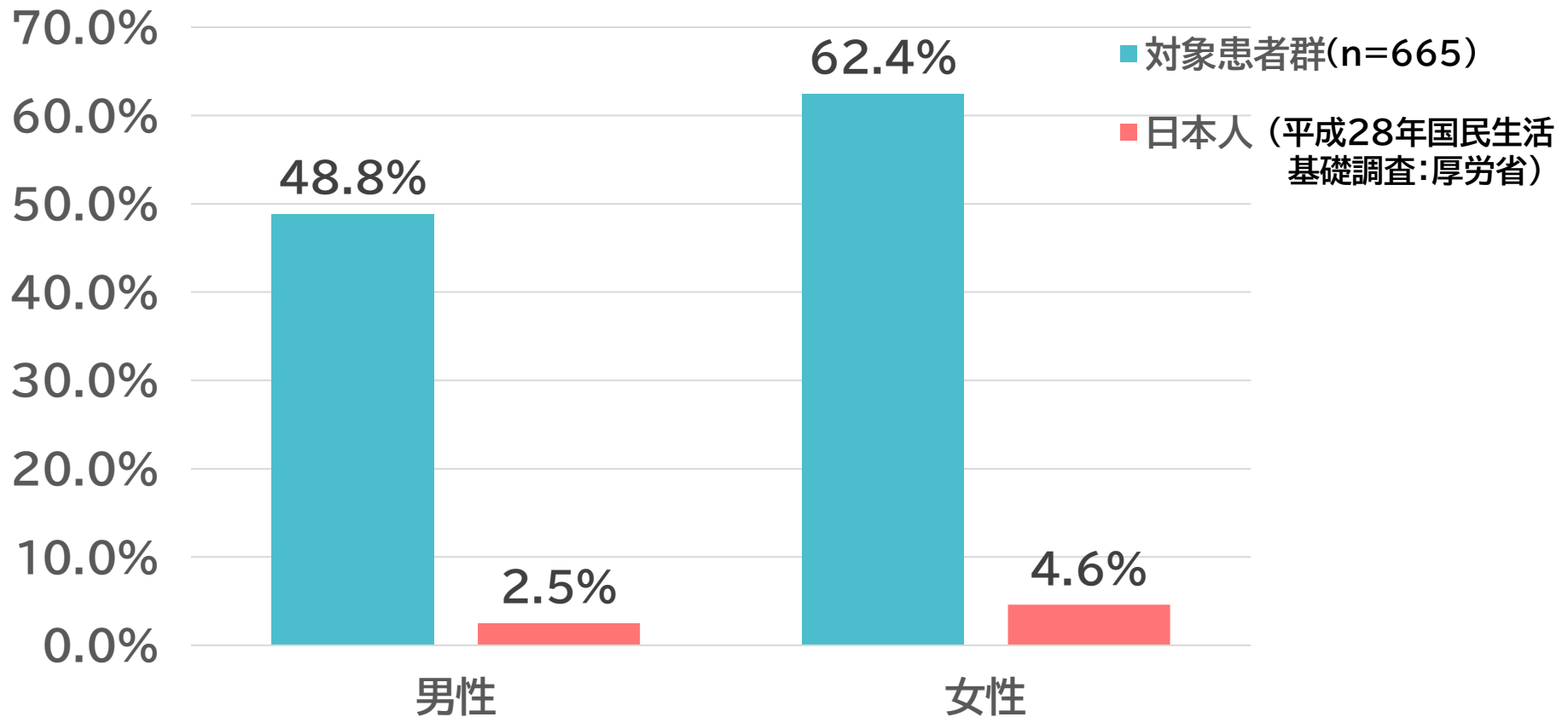


Steel-Dwassによる多重比較

結 果

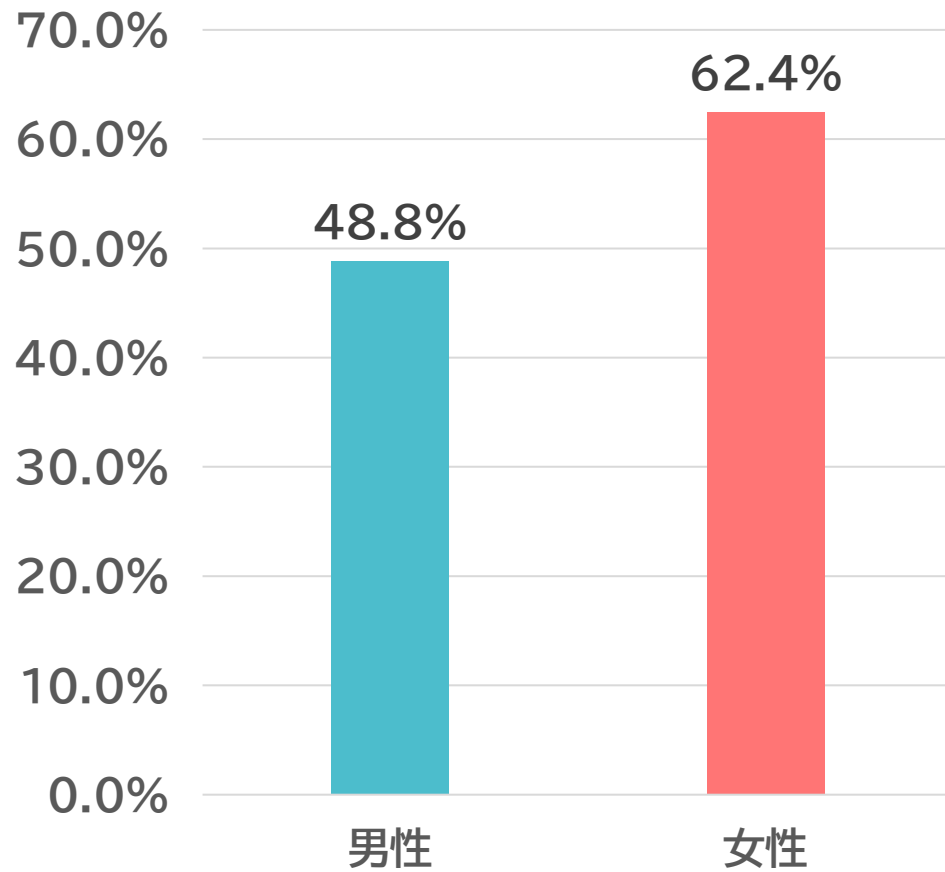
透析患者の便秘有病率は一般日本人よりはるかに多かった。

性別別便秘有訴率



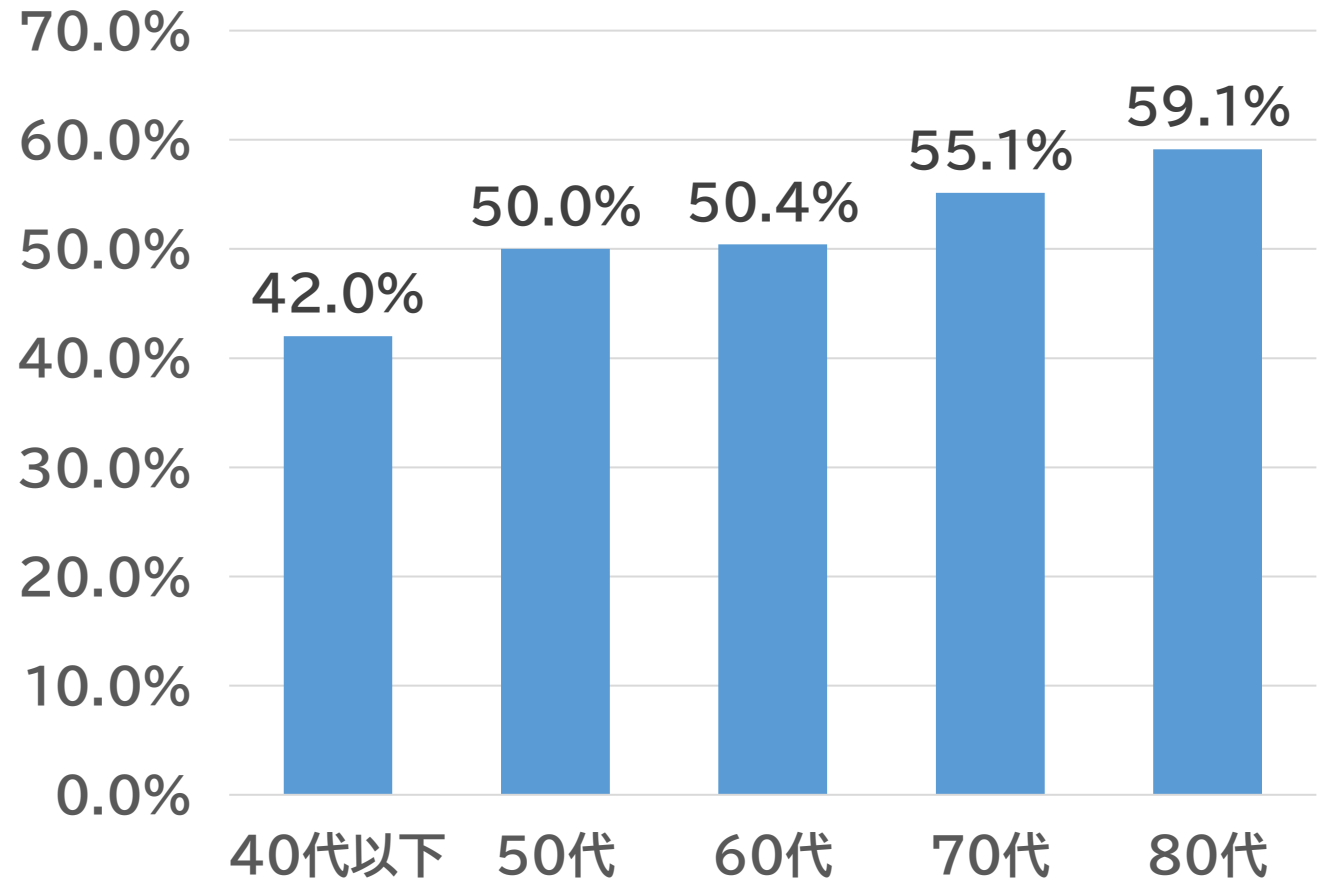
結 果

性別別便秘有訴率



女性を基準とした男性の便秘有訴率の
オッズ比 0.59(95%信頼区間0.43-0.82)

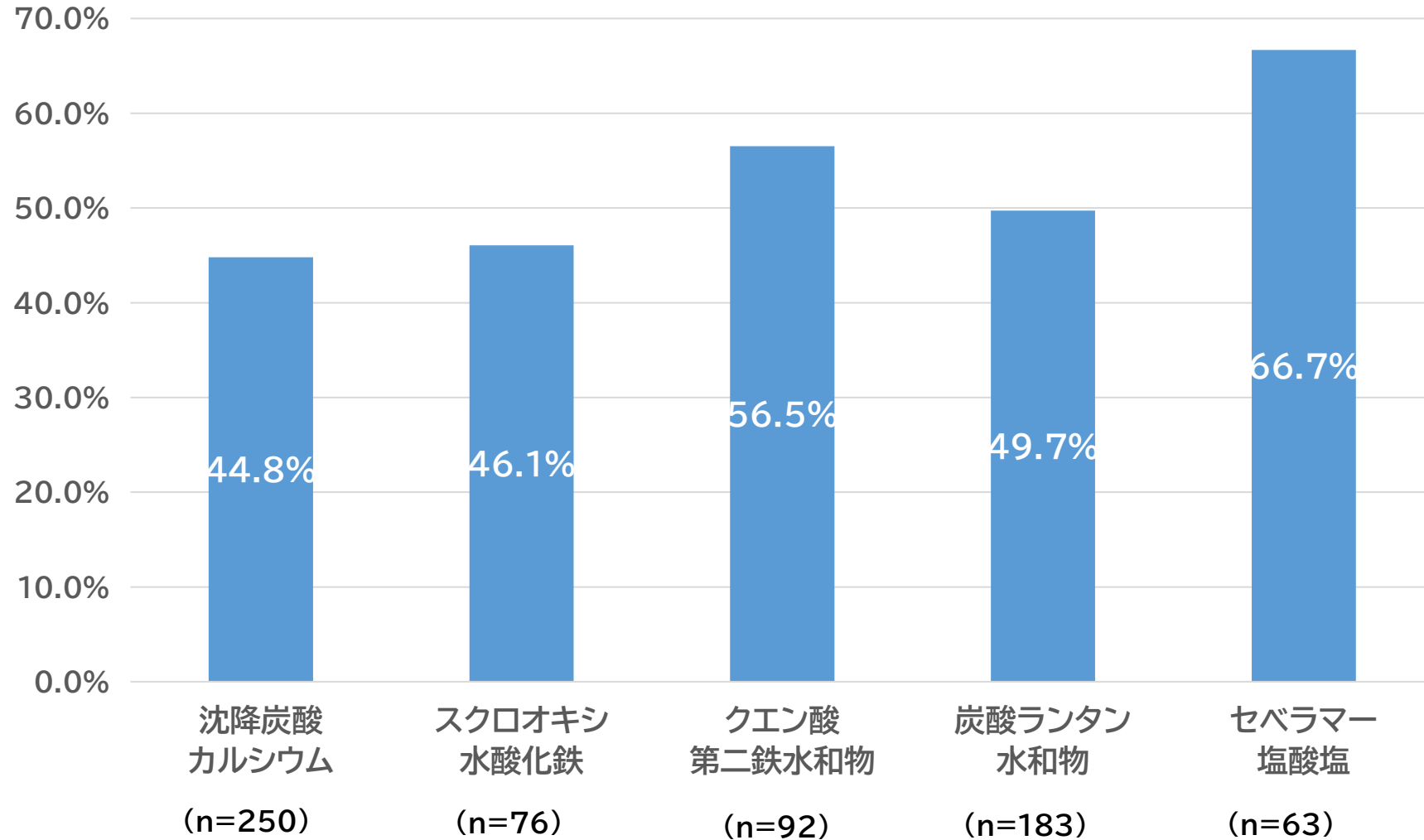
年代別便秘有訴率



10歳増加すると
オッズ比で1.14倍(95%信頼区間1.01-1.28)高くなった。

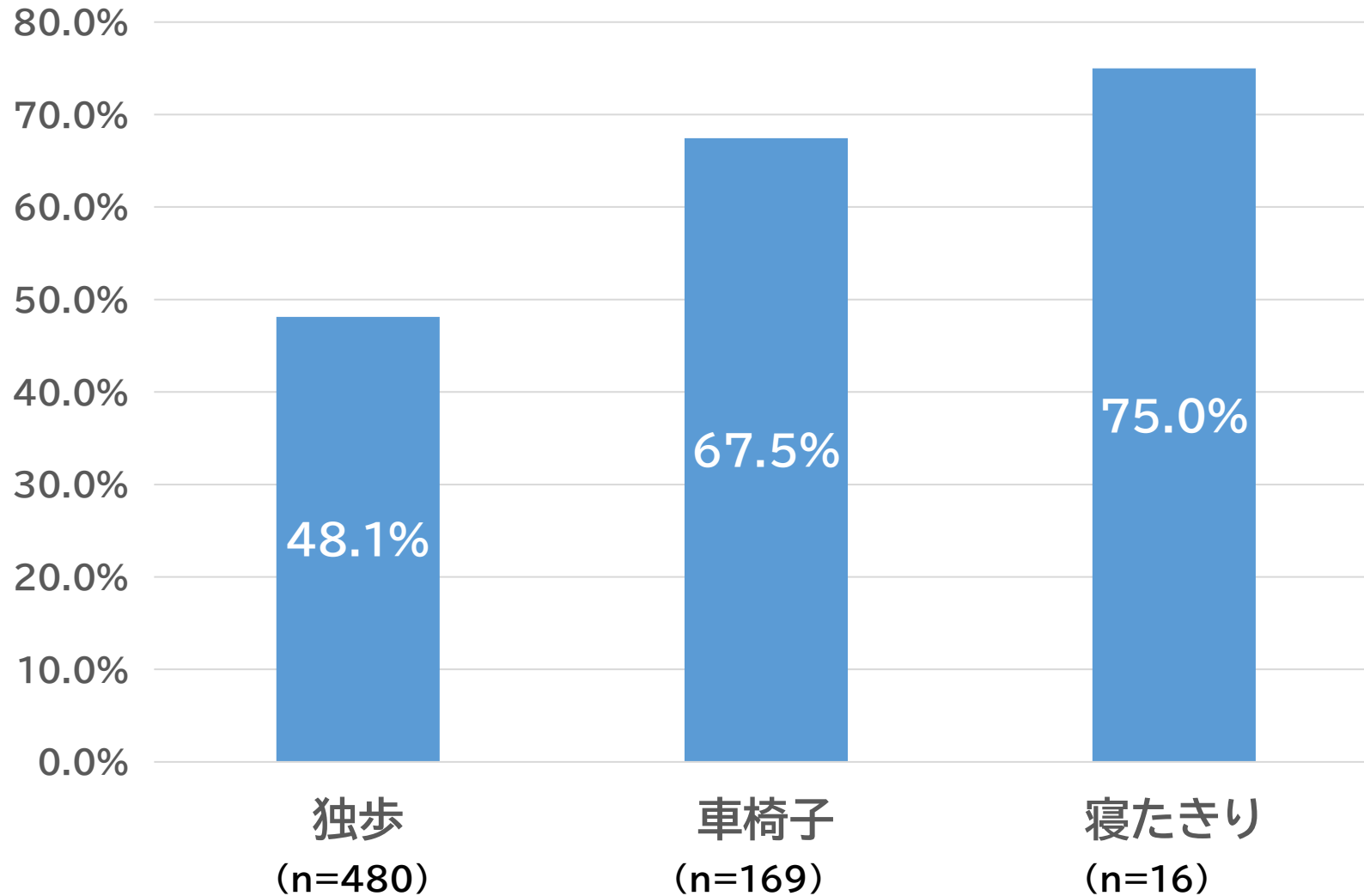
結 果

リン吸着薬内服群別便秘有訴率



結 果

日常活動度ごとの便秘有訴率



結 果

	オッズ比(95%信頼区間)		P値
性別	0.54	(0.36-0.81)	< 0.01
年齢 (/10歳)	1.03	(0.90-1.24)	0.50
DW	1.00	(0.98-1.01)	0.84
Alb	1.50	(0.93-2.42)	0.10
DM	0.87	(0.62-1.23)	0.44
除水率(%)	1.06	(0.95-1.18)	0.34
Hb	0.94	(0.81-1.08)	0.37
Kt/V	0.78	(0.05-1.50)	0.45
nPCR	0.47	(0.16-1.39)	0.17
IDF vs HD	1.09	(0.66-1.81)	0.73
OHDF vs HD	1.25	(0.85-1.83)	0.26
沈降炭酸カルシウム内服	0.63	(0.44-0.91)	<0.05
スクロオキシ水酸化鉄内服	0.62	(0.36-1.06)	0.08
クエン酸第二鉄水和物内服	1.05	(0.63-1.75)	0.84
炭酸ランタン内服	0.82	(0.55-1.21)	0.32
セベラマー塩酸塩内服	1.72	(0.96-3.08)	0.07
定期処方薬種類数	1.13	(1.07-1.19)	< 0.01
車椅子 vs 独歩	2.13	(1.34-3.39)	< 0.01
寝たきり vs 独歩	4.10	(1.14-14.70)	<0.05

1.0

結 果

- ・透析患者の男女の便秘有訴率は53.7%で、日本人の便秘有訴率よりもはるかに高い結果となった。
- ・年代別の便秘有訴率は加齢に伴い高くなった。
- ・リン吸着薬により便秘有訴率に違いがみられた。
- ・日常活動度の低い患者群での便秘有訴率が高かった。

考 察

日常活動度が低い患者ではセベラマー塩酸塩投与を避けることで、より便秘を抑制する可能性が示唆された。

便秘の抑制には沈降炭酸カルシウムもしくはスクロオキシ水酸化鉄投与が好ましい可能性がある。

結 語

透析患者の便秘有訴率が高い。

患者個々に合わせたリン吸着薬の選択は、
便秘を抑制し予後リスクを低減する可能性が
示唆された。